

公立世羅中央病院だより



公立世羅中央病院の近未来像(1)

公立世羅中央病院 院長 末廣 眞一

平成16年に始まった新医師研修制度は医療現場で大変な変革をもたらしました。平成16年と平成17年の二年間医学部新卒の医師が全く大学医局に入らなかったのです。たった2年間と思われるかもしれませんが、多くの医局が深刻な医師不足に陥り、医局に医師派遣をお願いするしか医師確保の有効な手立てがなかった田舎の公立病院は医師不足が深刻となりました。この公立世羅中央病院も私が院長になったころはとんでもない医師不足に陥り、一時は病床閉鎖も考えておりました。その後少しずつ奇跡的に医師が増えて何とか救急診療ができるような体制となりました。

医師不足に陥った病院は当然収入も激減し、経営難に陥っておりまして。公立病院の経営難は経営している自治体の財政を圧迫しますので、その対策として平成19年に総務省より公立病院改革ガイドラインが公布され、経営改善の目的で病院間の再編や民営化、診療所化などが次々と行われるようになりました。公立世羅中央病院も三原市立くいな市民病院と経営統合を行い、病床を当院へ集約し、三原市立くいな市民病院は診療所となりました。この近辺では上下の府中北市民病院もJA府中総合病院と経営統合して機能を縮小され、常勤医師も3人となり、とても急性期の疾患に対応でき

なくなっております。こうした事態は日本各地で見られております。

さらに国は医療費の高騰から国の財政を守るために、病院病床数を減らそうとしております。人口10万人に対し1000床を目標に各地域で検討会議を行なわせております。世羅町は三原市尾道市と同じエリアに属しています。このエリア全体で見ますと1000床あまり過剰となっております。しかしながら、世羅町だけで見てみますと、国が目標とする病院病床数には程遠い現状であります。人口に対しての病床数は三原市の二分の一以下しかないのが現状です。一人の医師が診る救急患者さんの数はこの尾三エリアで最多でありますし、心肺停止の患者さんは他の救急病院に比べ、2.5倍

10倍と、断トツに多い状況となっております。どうしてこのような不公平が生まれるのでしょうか？一般には交通の発達した現代では、世羅町から30〜40km離れていても、三原市や尾道市に簡単に通院できると考えられているのです。目や耳の機能が低下し、判断力も低下している高齢者が車を運転して三原市や尾道市に通院することは大変危険なことでありますし、家族が連れて行くとすると家族の負担は相当なものになります。ではこの状況を解決するにはどうすればよいか、次回解説したいと思います。

